

学会参加報告

第61回日本小児保健協会学術集会を振り返って

那覇市保健所 地域保健課
保健師 泉 侑 里

「笑顔の絶えない子どもたち～復興・未来・希望」をメインテーマに、平成26年6月20日から22日の3日間の日程で、第61回日本小児保健協会学術集会が福島県で開催されました。東日本大震災による地震、津波のみならず、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性物質の被害で、今なお健康被害の影響や避難生活が続いている福島県で学会が開催されたことは、小児保健に携わる者として感慨深いものがありました。講演内容においても、放射線の健康被害や子どもたちの心身への影響を議題としているものが多くあり、震災から3年が経過した現在においても健康被害や風評被害に苦しむ住民の姿に胸が痛むと同時に、震災を忘れず保健師としてできることを考え続けなくてはならないと強く感じました。

初日は「保健師のための乳幼児健康診査技能講習会」があり、乳幼児虐待、発達障害、歯科保健、栄養と幅広い分野における基礎知識、問題を捉える視点、保健師に求められる技術について学びました。平岩氏の講演の中で、保健相談で多用されがちな「様子をみましょう」は犯罪になりうるという言葉は衝撃的なメッセージでした。健診という育児中の短い時間の中で、子どもと保護者が「健診に来てよかった」と笑顔で帰宅してもらえるよう、最新の知識や情報の収集のみならず、多様な価値観や育児観を受入れられるところ、寄り添うことのできるスキルの

習得が保健師には必要だと改めて感じました。

2日目の基調講演では、「すこやか親子21をふりかえり、これからの母子保健・小児保健を展望する」というテーマで日本子ども家庭総合研究所の柳澤氏の講演がありました。すこやか親子の策定、第1回第2回の中間評価に携わっていた柳澤氏の講演はわかりやすく、最終評価や指標分析から見える課題として「育てにくさ」を感じる親に寄り添う支援があげられていた点からも、日頃おこなっている発達障害児を持つ保護者支援の意義や重要性が感じられ、保健師の立場や強みを見出すことができました。

その他にも、シンポジウム、一般口演、ポスターセッションを通し、医療・保健・福祉・教育と小児を取り巻く様々な分野の報告や意見を聞くことができ、とても有意義な経験ができました。また、集会後に催された懇親会で、日頃交流することの少ない小児科医の先生方をはじめ、他市町村保健師、事務局の方々とお話しできたことは、今後の保健師活動の励みとなる充実した時間でした。

今回の学会参加を地域支援に活かしていけるよう、学び考えていきたいと思えます。

最後になりますが、本学術集会への参加にあたり、御支援を賜りました沖縄県小児保健協会の皆様、ならびにご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

学会参加報告

第61回日本小児保健協会学術集会に参加して

国頭村役場

保健師 荒木善光

福島市にて開催された日本小児保健協会学術集会に参加させて頂いた。会場のある福島駅近辺においても、「除染をしています」という看板が目に入る。街を歩く人はごく日常のようにその前を横切るが、震災の影響の大きかった沿岸部の現状を自らの目で確認したいという思いが募る。学会開始前に有志と一緒にレンタカーを借りて、現地へ向かう。

青々とした新緑が美しい山々の谷あいには続く民家や畑が車窓から過ぎ去っていく。次第に「除染作業中」と書かれた桃色の旗が目につき、山積みされた汚染廃棄物入りの黒い除染袋や保護衣を装着した作業員等、物々しい雰囲気にも包まれる。帰還困難区域からは通行許可書が必要であったため、迂回路にて沿岸部へ向かう。曲がった支柱だけ残されたガードレールや、震災前は街並みがあったであろう何もない土地が広がる。未だ多くの方が避難生活を送らざるを得ない現状を目の当たりにすると震災の脅威に愕然とすると同時に、復興への困難さを痛感する。

「笑顔の絶えない子どもたち～復興・未来・希望～」をメインテーマに学会では、「放射線災害をはじめとする福島原発事故と健康リスク」「SST さまざまな問題を通して」「ネット依存」「情報モラル」「タンデムマス・スクリーニング」「エコチル調査」「大人が笑えば子どもは笑う」等の小児保健に関する重要な話題が挙がっていた。市民公開講座では、現地住民の原発震災に対する不安が続いていることを切実な声として聞くことができた。これらの中でも、「自分以外の相手が主役で、相手の状態に合わせ、対応すること」などコミュニケーションスキルの重要性を提案していた大棟氏や、「リアクションは大きく、こまめにほめること」などSSTを紹介していた平岩氏の講演が印象に残った。子どもの自己達成

感を育成し、成功体験を繰り返すことによって獲得する生活習慣を増やすことは成長する過程の中で重要である。その上で、子どもができない体験があるがままのその子自身の経験として、支援者や保護者が受け入れ、十分に向き合い、一緒に寄り添いながら支える大切さも実感した。今後、保健事業や個別支援の中でこれらのことを意識的に心がけて、実践していきたい。

国頭村では乳幼児健診や巡回支援専門員整備事業等にて、発達障害児(者)のライフステージを通じた早期の発達支援を行っている。また、2公立保育所と1公立幼稚園を統合し、幼保連携型認定こども園を整備する予定で調整している。懇親会では沖縄県内で活躍する小児科の先生方と意見交換する機会があり、「この構想段階から療育・育児支援等の視点を取り入れるということであれば、協力できることもあると思う」との助言もあり、先生方とのつながりを得ることもできた。

このような貴重な機会を提供して頂いた小児保健協会の皆様に心より感謝申し上げます。



左写真 我々の車の前を走る除染車。汚染廃棄物入りの黒い除染袋も横に見えます。